公益財団法人 長崎平和推進協会

2024（令和6）年12月

ピース・ウイング長崎 会報 へいわ

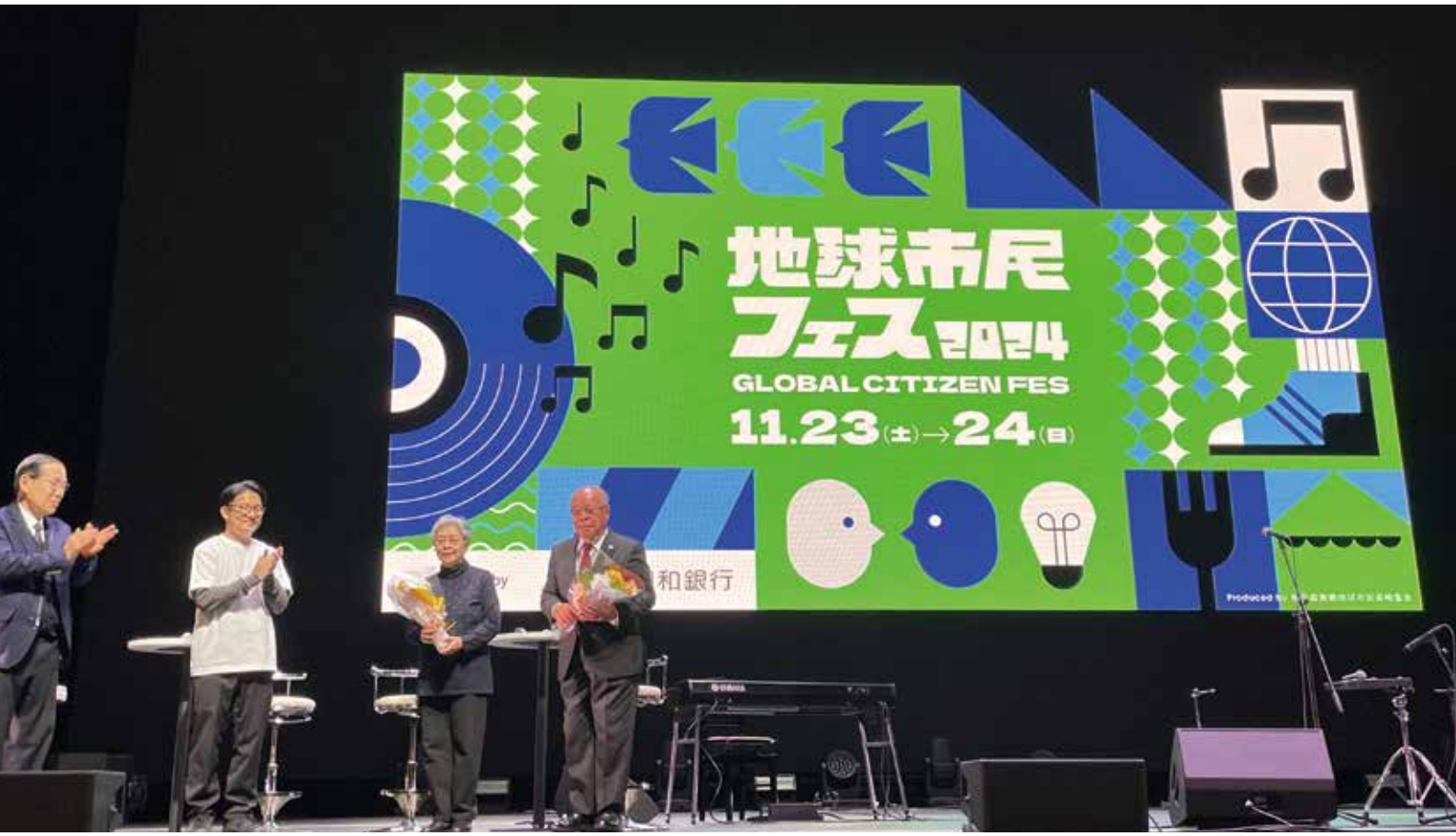
184号

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

16 平和と公正をすべての人に

協会webサイト

■ 寄稿　日本被団協のノーベル平和賞受賞を受けて
■ 初開催「地球市民フェス2024」
■ 森田孝子書道展　平和への願いを書に託して
■ 淵中学校生徒による被爆体験記の朗読会
■ 長崎・広島・北九州の若者平和活動団体の交流
■ 平和の文化キャンペーン　ラウンジコンサート2024
■ 被爆体験記企画展「幼い姉弟が見た広島・長崎」
■ カザフスタン共和国で原爆展
■ 家族・交流証言者　交流会
■ 写真資料調査部会 培われた分析能力②
■ 会員の広場
■ TOPICS（日本語弁論大会、純心中学校原爆写真展、茂木中学校MIRAIよりご寄附）



「地球市民フェス２０２４」にて　日本被団協の『ノーベル平和賞』受賞を祝い花束贈呈　（詳細は４～５ページ）

日本被団協（日本原水爆被害者団体協議会）のノーベル平和賞受賞を受けて

長崎大学核兵器廃絶研究センター
准教授　中村 桂子

中村桂子（なかむら・けいこ）
研究分野は核軍縮、核兵器廃絶と市民社会の役割。若い世代を対象とした軍縮・平和教育に関する研究・実践にも力を注いでいる。2001年から12年まで、特定非営利活動法人ピースデポ（横浜）の研究員・事務局長として核問題に取り組む。2012年より現職。

ノルウェー・ノーベル委員会が「日本被団協」の名を告げたその瞬間、湧き上がる喜びとともに、すでに鬼籍に入られた方を含む、あの方この方の顔が次々と脳裏に浮かんだ。私が核兵器廃絶を生涯のテーマと決める上で、大きな影響を与えてくれた被爆者の方々だ。彼ら彼女らの存在なくしては、私の今の仕事への向き合い方はまったく違うものになっていただろう。

私に限らず、核兵器廃絶に取り組む研究者、実務家、NGO関係者の中に、被爆者との出会いが自分の人生を変えた、と振り返る者はけっして少なくない。

事実、被爆者は世界を動かしてきた。ノーベル委員会が授賞理由として述べたように、「核のタブー」、すなわち核兵器使用は道義的に許されないとする国際的な規範は、被爆者が自身の壮絶な体験を語ることなしには生まれてこなかった。広島、長崎以降、核兵器使用が実際に検討されたとされる事例は少なくないが、最後の一線が踏み越えられることはなかった。そこには間違いなく、人間が核というものを操ることに対する畏怖の念が働いていただろう。

しかし、長い反核運動の歴史において、もっとも強く人々の心を動かしてきたのは、語られる体験の壮絶さだけでなく、それを語る被爆者一人ひとりの姿であったように思う。筆舌に尽くしがたい苦しみを抱えながら、「他の誰にも同じ思いをさせたくない」と、文字通り身を削りつつ訴える被爆者の生き様に、人は感動し、共感し、共鳴していったのだ。2017年に採択された核兵器禁止条約が、その前文において「hibakushaの容認し難い苦難」に言及するだけでなく、核兵器廃絶の実現に向けた「hibakushaの努力」を称賛したのは、まさにこの点にあったと言える。

「かくて私たちは自らを救うとともに、私たちの体験をとおして人類の危機を救おうという決意を誓い合ったのであります」――崇高な思いが綴られた1956年8月の日本被団協「結成宣言」は、それを読む人にいつでも新鮮な驚きをもたらす。そのとき被爆からわずか11年。政府からの公的な支援は存在せず、多くの被爆者が心身への深い傷、生活苦、差別や偏見に苛まれていた。被爆者が残した数々の証言には、自らの運命を嘆き、あの日命を絶たれた人々を羨みさえするといった、壮絶な心情が吐露されている。しかしそうした苦しみと絶望の日々の中でも、被爆者は、「もうだまっておれないでてをつないで立ち上がろう」（結成宣言）と動き出したのだった。

それから68年余――被爆者の生き様が私たちに示してきたのは、暴力と憎しみの連鎖を断ち切ろうとする人間の強さであるように思う。もちろんそれが困難や葛藤に満ちた道のりであったことは想像に余りある。肉親を奪われ、何もかもを焼き尽くされ、人生を狂わされた恨み、怒りは容易に消えるものではないだろう。実際、そうした苦痛に満ちた被爆者の怨嗟の声を私自身も幾度となく耳にした。しかし、どのよ

うな困難な時代にあっても被爆者は希望を捨てず、他者の苦しみに心を寄せることを忘れず、「核なき世界の実現」という公共善に向けて対話を重ねることをあきらめなかった。それは不信と暴力が跋扈する今の世界の対極にあるものであり、私たちにそれを乗り越える力があることを思い起こさせてくれる。

確かに今、私たちの世界はまさに核をめぐる崖っぷちにある。ノーベル委員会が警鐘を鳴らしたように、「核のタブー」は瓦解の危機に瀕している。それはロシアや北朝鮮など、核兵器使用の可能性を公言することさえ厭わない一部の国家の責任に帰すものだけではない。周辺国の脅威を理由として自国のさらなる核抑止力依存を正当化する論調は世界各地で高まっている。もちろん日本もその例外ではない。

今年9月の自民党総裁選の中でも現首相の石破氏をはじめとする有力政治家が、米国との核共有の可能性や「非核三原則」の見直しの可能性について明確に言及をした。以前であればこうした発言は世論の厳しい集中砲火に晒されていたことだろう。しかし国際的な安全保障環境の悪化を前に、そうした批判の声は勢いを失っている。「今日のウクライナは明日の東アジアかもしれない」はいわば呪いの言葉として、平和を求める人々の当たり前の想いをがんじがらめに縛りあげ、身動きできなくさせているのだ。

だからこそ今、私たちは原点回帰をしなければならない。血で血を洗うような争いが続き、「力こそ正義」の論調がはびこる今だからこそ、被爆者の歩みから学び、それが示す思想と哲学に光を当て続けなければならない。被爆者の声に耳を傾け、共感と連帯に基づく新しい世界を創造する力に変えていかなければならない。被爆80年の節目を前にした今回のノーベル平和賞受賞は、私たちがそうした力強い一歩を踏み出すためのまたとない好機を与えてくれている。

長崎原爆資料館や国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館でもノーベル賞受賞を祝う看板などを設置

ノーベル平和賞授賞式

ノーベル平和賞の授賞式が12月10日ノルウェーの首都オスロの市庁舎で開かれました。

式には日本被団協の代表団30人が出席、このうち田中重光さんら代表委員3人が登壇し、賞状やメダルを受け取りました。スピーチで田中熙巳さんは「人類が核兵器で自滅することがないように。核兵器も戦争もない世界の人間社会を求めて共に頑張りましょう」と訴えました。

日本被団協は被爆者の立場から長年、核兵器の廃絶を訴えてきたことが評価されての受賞で、日本のノーベル平和賞受賞は1974年の佐藤栄作元総理大臣以来50年ぶりです。

長崎市役所では授賞式のパブリックビューイングが行われ、市民ら約150人が来場し受賞の喜びを分かち合いました。中には亡くなった被爆者の写真を手にする人の姿も見られました。

左からノルウェー・ノーベル委員会のフリードネス委員長、
田中熙巳さん、田中重光さん、箕牧智之さん（写真提供:長崎新聞社）

オスロを訪れた被団協のメンバー

長崎でのパブリックビューイング

「会議・講演会形式」から「音楽フェス」中心のスタイルに一新

■世代を超え 平和を考える

音楽ライブなどを通して被爆地・長崎から平和を考えようという「地球市民フェス2024」が、今秋開業したばかりの長崎スタジアムシティで11月23・24日に行われました。

「核兵器廃絶―地球市民集会ナガサキ」の初開催から24年。これまで6回の国際会議を重ねてきましたが、参加者の減少が続いたことなどから、今回は被爆3世の若者らが中心となり、幅広い世代が参加しやすいようにと「音楽フェス」形式に衣替えしました。

メインアリーナでは、加藤登紀子さんやヒップホップグループ「スチャダラパー」などによる無料ライブが開かれたほか、核兵器廃絶や被爆体験の継承をテーマとしたトークセッションなどが行われました。

このほか施設内では、飲食店・雑貨店などが並んだ「マルシェ」や、工作体験を中心とした「キッズコーナー」、V・ファーレン長崎による「サッカー教室」なども開催され、多くの若者・家族連れなどで賑わいました。

24日には日本被団協（日本原水爆被害者団体協議会）のノーベル平和賞受賞を記念した特別トークセッションが開かれ、被団協代表委員の田中重光さん（長崎被災協会長）、被団協代表理事の横山照子さん（長崎被災協副会長）、地球市民フェス実行委員長の朝長万左男さん、地球市民フェス総合プロデューサーの林田光弘さんが登壇し、ノーベル平和賞受賞の意義などについて語り合いました。

加藤登紀子さん

7組のアーティストが出演したライブ会場

キッズコーナー、ヤシの葉でお面作り

核兵器について考えるトークセッション

被爆体験記企画展「幼い姉弟が見た広島・長崎」

トークイベントで二重被爆の姉が当時を語る

10月20日～31日、国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館の交流ラウンジにて第14回被爆体験記企画展「幼い姉弟が見た広島・長崎」を開催しました。

二重被爆者である福井絹代さん（青森県在住）と、相川國義さん（故人）の姉弟が広島と長崎で二度も目の当たりにした被爆の惨状と平和への思いを、証言映像や原爆の絵・手記を通して伝えました。

開催初日は青森から福井さんと辻村泰子さん（青森県原爆被害者の会）を迎え、追悼平和祈念館前館長の髙比良則安さんとともにトークイベントを行いました。

昨年度福井さんの被爆体験証言ビデオの収録に立ち合った髙比良さんに進行役を務めていただき、福井さんにとって強く記憶に残る被爆体験や若い人たちに対して伝えたいこと、被爆者の支援に携わる辻村さんの思いをお話しいただきました。

福井さんは「弟と2人でよく生き延びてこられたと思う。こんな思いはもう誰にもさせたくない」と、当時を振り返りながらお話しされました。

左・髙比良前館長、中央・福井絹代さん、右・辻村泰子さん

好評につき再展示

被爆体験記企画展「幼い姉弟が見た広島・長崎」

12月20日（金）～1月14日（火）　（休館日:12月29日～31日）

追悼平和祈念館　地下2階　交流ラウンジ　入場無料

初開催「地球市民フェス2024」これまでの

■推進協も全面的に協力

主催団体の1つである長崎平和推進協会では、様々な形で「地球市民フェス」に関わりました。

アリーナ1階奥のラウンジで開かれたワークショップ「被爆者と出会うカフェ」には、継承部会に所属する被爆者にも参加してもらいました。テーブルごとに、1人の被爆者を数人の参加者が囲んで、じっくりと語り合いました。「なぜ体験を語ろうと思ったのか」「若者が学ぶべきことは何か」といった質問が出たほか、戦時中に使われた防空頭巾を持参し話をする被爆者もいて、参加者からは「体験を直接聞くことで、よりリアルに感じられた」「こうしたイベントにもっと市民が参加して、若い人に伝えてほしい」といった意見が聞かれました。

NGOや企業の活動を紹介するブースが設置されたコンコースでは当協会も出店。協会オリジナルデザイン「Peaceなねこ」シリーズのTシャツや缶バッジ、クリアホルダーなどのグッズを販売しました。あわせて会員の勧誘も行い、フェス見学者に入会していただきました。

ホテル最上階にあるライブレストランでは「朗読と音楽の調べ」が行われ、追悼平和祈念館の朗読ボランティア「永遠（とわ）の会」のメンバーが参加しました。長崎県音楽連盟のアンサンブルによる美しい演奏と、永遠の会14人の被爆体験記の朗読が相まって、来場された方々の核兵器廃絶への想いは一段と強まった感じがしました。

朗読と音楽の調べ

協会グッズの販売ブース

被爆者と出会うカフェ

森田孝子書道展　平和への願いを書に託して

長年、原爆死没者名簿の筆耕をされている森田孝子さんの書道展を11月2日～7日、追悼平和祈念館交流ラウンジで開催しました。

この書道展は今年で3回目となり、新たに被爆者の六田正英さん、森田博満さんの言葉や森田先生の平和に対する思いを書にして展示しました。

オープニングイベントでは、書道教室に通っている子どもたちによる「平和の歌」の合唱を行いました。

今回は海外の方にも多くご来場いただき、英訳文を真剣に読みながら書の前で涙を流す外国人の姿も見られました。書を通して被爆者の言葉を伝えることができたのではないでしょうか。

原文を書いた森田博満さんと森田孝子先生

森田孝子書道展・本人コメント

「助けてください」「助けてください」被爆者の方の断末魔の叫び！

今年も長崎平和推進協会、国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館の皆様のご協力のもと、とても実りある書道展となりました。

今年は書に英訳をつけていただいたことで、多くの外国人の方々にも見ていただくことができ、私の平和への想いが少しずつではありますが広がりを感じた書道展でもありました。

チェコの方と長くお話をさせていただいたのですが、この書道展を見て次のような感想をいただきました。「被爆者の方々が本当は消し去りたい被爆直後の記憶が伝わってくる。ぜひ仲間たちと被爆の恐怖を共有し、話し合いの場を持ちたい」

この活動が原爆の悲惨さ、戦争の恐怖を考える時間となれば幸せです。

これからも被爆者の方々に寄り添い、書道展を続けていきたいと思います。

決してこの惨劇が繰り返されないことを心から願いながら…。

チェコ人見学者と森田先生

カザフスタン共和国で原爆展
長崎で研修を受けた大学生が来場者に説明

カザフスタン共和国のアルマティにある「カザフスタン国立中央博物館」で8月29日～9月12日、「ナルホーズ大学」で9月16日～28日に「ヒロシマ・ナガサキ原爆展」を開催しました。

会場には被爆の実相を伝える写真パネル、被爆体験記、被爆証言映像などを展示し、両会場合わせて6,025人が来場しました。

展示会場では、長崎で研修を受けたナルホーズ大学の学生2人が、写真パネルの説明をしたり、折り鶴の折り方を教えたりしました。

9月20日にはナルホーズ大学と追悼平和祈念館をオンラインでつなぎ、学生および一般の方を対象に、継承部会員の丸田和男さんが自身の被爆体験を語りました。聴講者の関心度が高く、多くの質問が出ました。

被爆体験を語り継ぐため
家族・交流証言者 交流会

9月22日、自身の体験を託したい被爆者（託したいかた）と、被爆者の体験を受け継ぎたい方（受け継ぐかた）が出会い、交流する「交流会」を長崎原爆資料館で実施しました。

受け継ぐかた15人は、まず「交流証言者」として活動する山下恵子さんが受け継いでいる被爆体験を聞き、その後、託したいかた2人（池田道明さん・丸田和男さん）からそれぞれの被爆体験や後世に伝えたい思いなどを聞きました。

どちらの体験を受け継ぐかを決めた「受け継ぐかた」は、10月中に改めて「託したいかた」から当時の状況などを聞き取り、原稿の作成を始めました。これから研修を重ね、「家族・交流証言者」としての活動開始を目指します。

現在、56人が家族・交流証言者として活動しています。

淵中学校の生徒による
被爆体験記朗読会

被爆体験記朗読ボランティア「被爆体験を語り継ぐ 永遠（とわ）の会」が1か月間にわたり朗読指導を行った、長崎市立淵中学校3年生による朗読会が11月1日、追悼平和祈念館交流ラウンジで開催されました。

山口カズ子さんの被爆体験と詩を朗読したほか、合唱も披露。朗読を担当した生徒からは、「朗読の学習を通して、山口カズ子さんの平和への思いと戦争の悲惨さを感じました。この学習で学んだことを最大限表現したいです」との言葉がありました。

永遠の会が目指す「被爆体験記に綴られた被爆の実相・平和への願いを次世代に伝える」ために蒔いた種がだんだんと育ってきていると感じた1日でした。

長崎・広島・北九州が連携
若者の平和活動団体による交流会

長崎市の「青少年ピースボランティア」、広島市の「中・高生ピースクラブ」、今年発足した「北九州市ピースフィールドクラブ」の交流会を10月13日、長崎原爆資料館で開催しました。

「原爆」のワードでつながる3市の団体が集まるのは初めてで、10～20代の約70人が参加しました。交流会では、班に分かれて「戦争や平和について考え、学ぶ意義」を話し合い、それをどのような形でアウトプットするのか、具体的な企画を考えました。

討論会やフェスの開催、合同SNSプロジェクトなどの案をはじめ、ミュージカル劇の具体的な構成まで考えている班もありました。この交流を機に、地域を越えた新しい取り組みにつなげていければと思います。

へいわ余話 編集者の独自目線で書くコラム

写真資料調査部会 培われた分析能力②

原爆被災写真を調べるためのスキルが役立つ

アルバムを調べる写真資料調査部会員

島の左下に鳥居がみえる

（前号の続き）今年6月「終戦当時のことを教えてほしい」と祖父のアルバムを持ち込んだアメリカ人女性に、当協会の写真資料調査部会のメンバーが対応した際の出来事。「海兵隊員だった祖父は1945年9月に長崎から上陸し日本に駐留した」とのこと。かなり難しいミッションだが、部会員らは写真に写り込んだわずかな情報から場所を推定していった。

突破口は「かすかに鳥居が写った島」の写真だった。「長崎であれば壱岐の小島神社だが…」「でも島と陸地が橋で結ばれているから違うな」などと話していると、別の写真で「TAKESHIMA」と書かれた看板を発見。「おいおい、竹島って日本全国に幾つあるんだ～」と悲鳴を上げつつも喜々とした表情の部会員ら。グーグルアースやストリートビューを駆使して1つの答えを導き出した。「愛知県蒲郡市の竹島に八百富神社ってあるよ」早速、当時の写真と現在の画像を見比べてみると、橋の欄干・鳥居・石灯籠など特徴が一致した。

タケシマ・バンブーアイランドの看板

当時のことを記した文献がないかリサーチしたところ、名古屋の大学准教授が書いた論文に「1945年10月～1952年5月の期間『竹島レストセンター』という米軍専用の保養地が存在した」との記述も発見。推察するに女性の祖父は、サイパン→長崎→蒲郡と移動しながら写真を撮ったようだ。

79年前の写真

ストリートビューの画像

さらに、長崎で撮られた写真、特に被爆関連のものがないか部会員らは調査を進めたが、116枚のうち約半数は蒲郡、約1/4はサイパンで撮られたスナップ写真で、残りは撮影場所不明。期待された「原爆被災写真」は残念ながら確認できなかった。ともあれ、突然の依頼を快く引き受け、わずか2時間程でここまでの結果を出した写真資料調査部会の心意気と分析能力の高さを称えたい。

「平和の文化キャンペーン」関連事業 ラウンジコンサート2024

音楽を通して平和について考えてもらおうと、今年も長崎県音楽連盟の協力を得て、追悼平和祈念館でラウンジコンサート「Music Garden Pray&Play」を開催しました。9月はピアノ・ギター・フルートのアンサンブル、10月は2つの市民合唱団、11月はピアノ・弦楽器・管楽器によるユニットと、それぞれ素晴らしい歌声や美しい演奏を披露してくれました。コンサートのたびに会場に入りきれないほどの聴衆が訪れており、平和への想いが多くの人々に伝わったものと感じています。

9月・秋のスクリーンミュージック特集

10月・平和へのハーモニー

11月・秋の日は、こころ静かにアンサンブル

NO.31

Peace Wing Nagasaki

会員の広場

長崎・広島それぞれで被爆した祖父母を持つ被爆3世です。学生時代は、ごく自然に平和学習に取り組んでいましたが、歌手の道を志し20歳で上京すると、それが特別な環境なのだと実感しました。

8月6日も9日も東京ではサイレンが鳴りません。黙とうしている人もおらず、普段と変わらない時間が流れていた――。近しい友達から「原爆落とされたのって、広島とあと一つどこだったっけ？」と話をされた――。長崎から外へ出ると、原爆の事実は忘れ去られていました。

その頃から、何か自分にもできることはないかと、長崎に帰るたびに祖父母から話を聞くようになりました。

ある時、祖母が「今、戦争のない幸せな時間が流れてると思うやろう？でもおばあちゃんは、また同じことが起きると思う」と呟きました。思ってもみなかった言葉にとてもショックを受けました。

そして、「私にできることは音楽だ」と思うようになり、祖父母の話を基にした曲を書きはじめました。

（次号に続く）

シンガーソングライター
上奥まいこ
（長崎市出身）

TOPICS！ へいわトピックス

6人の外国人がスピーチ　日本語弁論大会

10月19日、追悼平和祈念館で「第16回～語り合おう in Nagasaki～外国人による日本語弁論大会」を（公財）長崎県国際交流協会との共催で開催しました。

4か国6人の外国人の皆様が、日頃の努力の成果を発揮されました。最優秀賞に輝いたカザフスタン出身のムスタフィン・バトルハンさんは「言語の壁」をテーマにお話されました。

(6人のスピーチはこちらからご視聴いただけます)

ユースボランティアの中学生ら　学校でも原爆写真展を開催

純心中学校プレゼン教室にて11月5日～7日、「純心原爆写真展」が開かれました。企画したのは夏の原爆写真展ユースボランティア参加者を含む「中学アドバンス同好会」で、ふだんは2年生4人で社会課題の解決方法を探す活動をしています。

ユースボランティア企画展で作成したパネル50点の中から36点を展示。4人がそれぞれ特に印象に残った一枚を黒板に貼り、見る人に共感を促すコメントを添えていました。

これからの被爆継承は、写真など資料の活用方法を共有することで、彼女たちのように自分で考え行動できる若者が育ち、平和の文化が築かれていくのだと思います。

茂木中学校『MIRAI』よりご寄附

長崎市立茂木中学校の有志による平和活動グループ「MIRAI」からご寄附を頂きました。11月4日に開かれた「茂木ふれあい祭り」で、メンバーがデザインしたオリジナルTシャツを販売し、その収益金を平和団体に寄附しているそうです。メンバーが作詞作曲したオリジナルの平和ソングを平和集会や地域の祭りで披露する活動もしています。今年誕生したばかりの「MIRAI」、平和な未来に向け動き出した中学生の活躍が期待されます。

生徒がデザインしたTシャツ

生徒代表から中川事務局長へ

世界の現役核弾頭の数（今年度より「全保有核弾頭数」から「現役核弾頭数」表示に変更）

	ロシア	米　国	中　国	フランス	英　国	パキスタン	インド	イスラエル	北朝鮮	合計
2024年6月1日	4,380	3,708	500	290	225	170	170	90	50	9,583

情報提供：長崎大学核兵器廃絶研究センター（RECNA）　https://WWW.recna.nagasaki-u.ac.jp/

寄附者紹介

ありがとうございます

（敬称略）

- 早水文子　十万円
- 丸形るみ子　十万円
- ㈱ひろたか　四万円
- 三根礼華　一万円
- 茂木中学校ＭＩＲＡＩ　一万円
- 森田博滿　一万円
- 山下勝久　一万円
- 北城祐二　七千円
- 髙比良則安　四千五百八十円
- 冨永聖史　三百円
- 匿名（2件）　一万四千円

皆様から寄せられたご寄附は、平和推進事業の貴重な財源として活用させていただきます。また、香典返しや退職祝返しをご寄附いただきますと、挨拶状・礼状・封筒をご用意いたします。ぜひ当協会にご寄附をお寄せください。

会員数報告

◎維持会員　1、098名
◎賛助会員　183名
◎学生会員　86名

令和6年11月30日現在

賛助会員（団体・法人）の一覧は協会ホームページに掲載しています。

ご支援・ご協力誠にありがとうございます。会員拡大にもご協力をお願いいたします。

会費納入のお願い

今年度まだ会費を納めていただいていない方は、活動の趣旨をご理解いただき、先にお送りしている払込票により納入くださいますようお願いします。

本紙は再生紙を使用しています。
令和6年12月31日発行

（公財）長崎平和推進協会　〒852-8117 長崎市平野町7-8　☎095-844-9922　FAX 095-844-9961